

Title	モンタペルティ戦争覚え書(上)
Author(s)	米山, 喜晟
Citation	大阪外国語大学学報. 74(3) p.71-p.85
Issue Date	1987-11-30
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/81164
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

モンタペルティ戦争覚え書 (上)

米 山 喜 晟

Note sulla Guerra di Montaperti (1)

Yoshiaki YONEYAMA

(レジュメと注は次回に掲載)

はじめに——モンタペルティーベネヴェント現象について

フィレンツェはある時期まで、むしろ後進的なコムーネであった。たとえばクセジユ文庫の『フィレンツェ史』の作者 Antonetti も、そういう後進的なコムーネが、何故13世紀後半から一挙にヨーロッパ全体を経済的にリードする都市となりえたのかという疑問を述べて^①おり、その飛躍については、まだ一定した説明はないというのが現状だといえるだろう。

また Hans Baron が対 Gian Galeazzo 戦争から行った説明^②も、15世紀の新しい思潮の説明としては仲々見事であるが、フィレンツェはすでにそれよりも一世紀以上前からイタリアでも特異な都市に変貌していた点を考慮すると、フィレンツェの独自性の説明としては不十分だと見なさざるを得ない。

そうなると、結局フィレンツェが基本的に変化したと思われる時期に焦点をあてて、その時点に生じた事件から社会変化のメカニズムを推理する他はないのであるが、私は主に最近の文学史関係の統計資料から、その時点が13世紀第三四半期(1251—75)で、変化のきっかけとなった事件とは、モンタペルティにおけるフィレンツェのシエナに対する惨敗(1260)とベネヴェントにおけるフランス王弟 Carlo d'Angiò によるホーエンシュタウフェン家の庶子 Manfredi 王に対する圧勝(1266)ではないかと指摘した^③。さらにその変化のメカニズムとは、モンタペルティの敗戦が主にポポロの最上層を直撃した結果、10年来猛威を振るって来た好戦的で膨張主義的ポポロ(人民もまた常に平和勢力であるとは限らない)政権が崩壊し、その担い手であったポポロの指導階層が従来の方針の愚かさを、まさにその全身に叩きこまれたこと、またシエナ側が窮地に追いこまれて採用した傭兵制度の効力が遺憾なく証明されたことがその第一段階に当たる。続いて、敗戦の責任者であるゲルフィ党のリーダーや、ポポロ政権の要人(それは必ずしもゲルフィ党とは限らなかったようである)が国外、特にギベッリーニ党勢力の稀薄な都市やフランスに亡命して、商業活動で富を得ただけではなく、新しい知識や国際的視野を得た(Brunetto Latini や、

Malispini の例^④で明らか) ことがその第二段階に当たる。さらにこれは望外の僥倖だったが、亡命者達が支援した Carlo d'Angiò の勝利の結果、フランスとナポリに一応法王庁が支持する兄弟国が成立し、イタリア半島はこれまでにない軍事的安定を見たため、亡命者が帰国、復権したフィレンツェは両王国からの庇護を最も期待できると共に、身勝手な紛争も起こし難い立場に落ち着いたのが第三段階で、この時期のフィレンツェのナポリ王国との密着ぶりは、10年間にわたってフィレンツェがシャルルに支配権を委ねたという事実からも明らかであろう。その間にモンタペルティ戦争でその効力が実証された傭兵制度が徐々に定着し、それに呼応して第一次ポポロ政権時代には市民をきびしく拘束していた兵役の義務が緩和される。こうした軍事的負担からの解放と、第二段階で亡命市民たちが経済的文化的活動の豊かな可能性を各地で発見したことが相俟って、フィレンツェでは Villani が証言している当時としては異例の教育熱^⑤が高まり、私塾通いがほぼ制度化した上、教育を受けた人材がもっぱら商業＝経済活動に集中するに至る。私は13世紀第三四半期以降に、フィレンツェがイタリアでも抜群の経済力と知的生産性を示し続けた背後には、およそこのようなフィレンツェ社会そのものの大きな変化があったのではないかと推定しておいた。敗戦の衝撃で、それまでの体制が打倒されるというのは、世界史上決して珍しいことではなく、むしろ程度の差はあってもごく自然に起きている筈の現象だが、その後何らかの幸運によって、一国の国民が長期にわたって軍事的負担から解放され、一応の独立を保つことができた上に、長期にわたって経済的文化的活動に専念しえたという例はそれほど多くはないのではあるまいか。実はフィレンツェと並ぶもう一つの稀な例が第二次大戦後の日本で^⑥、両者が敗戦後に示した経済的文化的な飛躍は、敗戦の衝撃による好戦的で膨脹主義的な旧体制からの脱皮と、特に人材面での軍事的負担からの解放、その上に新しい視野が加わったことで説明しうるのである。ただしフィレンツェの場合、その文化においては広義の文学や芸術面での飛躍が認められたのに対して、わが国ではむしろ科学技術の面が中心であったが、こうした方向性の違いも、敗戦の衝撃の性格の差からかなり明確に説明できるのである。またこうした現象は、理論的には何時の時代にも生じうるもので、その後に派生する Machiavelli らが直面したような問題^⑦にも共通性が認められる筈である。だから類似の現象をモンタペルティーベネヴェント現象と名付けて、比較検討することが可能ではあるまいか。

だがそうした一般化の前に、やはりモンタペルティーベネヴェント両戦争の実態をもう少しはつきりさせておく必要がありそうである。そこでさしあたり、この小論では対象をモンタペルティ戦争に絞り、同戦争に関する様々な記録を検討して、その実態を把握することにした。

第一章 Ricordano Malispini, Giovanni Villani, Marchionne di Coppo Stefani らの年代記におけるモンタペルティ戦争の記録

やはり何とんでも、G. Villani が『年代記』^⑧に書き残したモンタペルティ戦争の記録が、最

も世に知られて定説化したものと言えるだろう。実はその記述は、R. Malispini の『フィレンツェ史』^②や M. Stefani の『フィレンツェ年代記』^③ともほとんど一致しているので、年代的に見て最も早く、自らその戦争を体験した可能性の高い Malispini の記述が基礎となっていると見て差し支えあるまい。そこで以下に彼の『フィレンツェ史』中の記述の抜粋を示しておくことにする。

その前に、第一次ポポロ政権が成立したところからの模様を簡単に辿っておくと、Stupor Mundi (世界の驚異) と呼ばれて猛威を振るった Federico II も、パルマの敗戦以来意気衰え、庶子の Enzo がボローニャに敗れて捕虜となった後、1250年に庶子 Manfredi に殺された^④。フィレンツェでは皇帝の勢力をバックにして、Uberti 家を中心とするギベッリーニ党が、ゲルフィ党を追放(1248年)していたが、その後間もなく Federico の運命が急変し始めると、トスカーナでもギベッリーニ党も急激に力を失い、フィレンツェでは重税と貴族の暴力や侮辱と戦うためポポロの団体が編成される。最初の Capitano del Popolo に Messer Uberto da Lucca を選び、12人の長老(anziano)の下で、36人の隊長(caporale)が、各地区のポポロの隊を率い、さらに領域の人々をも86区に編成して、ギベッリーニ軍に対抗する準備をすすめた。そして、たまたま Federico が殺された晩、フィレンツェでも皇帝の代官が眠っている寝室の天井が落下して代官が死に、ポポロが結集してゲルフィ党を呼び戻し、ギベッリーニ党と和解させた^⑤。

Federico の嫡子 Currado がドイツから南下して Manfredi に毒殺され、Manfredi が王位を奪う。1251年、豪族 Ubalдини 家がムジェッロで兵を興し、フィレンツェのギベッリーニ党も亡命してこれに参加。フィレンツェ軍はルッカその他と組んでこれを破った。シエナとピサが敵方だったので敗走させた。

翌年の1252年フィレンツェはピストイアを攻める。またピサとシエナがルッカを討ったので、ピサ領内に侵入、フィレンツェとルッカはピサとシエナを破り、フィレンツェだけで捕虜3千を捕えた。裕福になったフィレンツェは同じころ聖トリニタ橋をかける。同年、Guido Novello 伯に率いられた、フィレンツェから亡命中のギベッリーニ党が、フィグネ^⑥に入り、同市はフィレンツェに叛いた。ピサ帰りのフィレンツェ軍はこれを包囲、伯の軍が無事に立去り、亡命者も平和裡に帰国できると保証したので、援軍は立去り、その町は条約に反して焼かれ、略奪され、破壊された。同年条約でフィレンツェが保護することに決められていたモンタルチーノを、シエナが攻めたので、フィレンツェは救援に赴き、シエナ軍を破る。「当時ポポロが善良なため、フィレンツェはよくまとまっていた^⑦」とある。同年フィレンツェは勝利によって地位も富も上昇したので、商人の要望で、フィオーリーノ金貨の鑄造を開始した^⑧。

1253年フィレンツェはピストイアを攻略、ピストイアは降伏、フィレンツェは監視用の砦を建設。フィレンツェはシエナを攻め、和平によりモンタルチーノへの権利を得た^⑨。またボッジボンシその他を獲得。さらにフィレンツェ軍は足を伸ばし、ヴォルテッラを包囲、同市民が攻めて出た隙に城内に入り、占領したが、略奪も殺人も行わず、市を改革した。同軍がピサに回ったので、ピサは恭順の意を示す。ピサ領内でフィレンツェ商人は無税で商売ができることになる。

1255年、フィレンツェはオルヴィエートがヴィテルボ(ラツィオ)を討つのに協力。Guido Guerra 伯を Capitano にすると、同伯が市の命令なしで、アレツォのギベッリーニ党を追放したので、フィレンツェ人は同伯の勝手な行動に腹を立て、アレツォにギベッリーニ党を帰国させた。^⑩

1256年、マンフレディ王の煽動で、ピサが和平を破った。フィレンツェ軍は、ルッカと協力してピサを攻め、敵領内で金貨を铸造。ピサはフィレンツェおよびルッカと和平を結ぶ。

1257年、フィレンツェはポッジボンシがギベッリーニ党やシエナと内通していると察知して、これを急襲、城壁を壊そうとした。同市の大使が首に革ひもを巻いてフィレンツェのコムーネの慈悲を求めにやって来たが、フィレンツェは彼らの要望を一蹴して、城壁を壊してしまった。^⑪

1258年7月末に、Uberti 家がマンフレディのすすめで、ゲルフィ党に近いと思われたポポロ政権の打倒を準備していることが発覚し、ポポロは同家の邸に乱入。一部を殺し、一部を処刑、残りは亡命。群衆が駆けつけて建物を破壊した。Uberti 家と共にギベッリーニ党の多くの家族が亡命した。その家名を列举。^⑫ 民衆は彼らの家や塔を破壊。亡命者はシエナへ向かう。ポポロ政権は対シエナ戦争に備えて、門や城壁を補強した。陰謀を企んだバヴィーア出身のヴァッロンブローザ修道院長が広場で斬首された。^⑬ そこでフィレンツェは法王に破門され、フィレンツェ市民はバヴィーア通過の際、様々な仕返しを受けた。当時フィレンツェのポポロは傲慢だが、公私を混同する者を厳しく罰した。

翌春2月、怒ったフィレンツェ人はアレツォ司教の町 (castello) ジェサを攻めてこれを破壊。ついで Alberti 伯の町ヴェルニア、マゴーナも占領、その住民にフィレンツェへの忠誠を誓わせた。これは Alberti 伯の Alessandro が幼いため、ギベッリーニ党の同族 Napoleone が奪ったのを、フィレンツェが奪回してやったもので、Alessandro は嗣子が絶えたため、1273年両市をフィレンツェに贈った。^⑭

Cap. CLXIV には当時のフィレンツェ市民の気風について触れた箇所があり、当時「真面目に粗食で暮らし (viveano sobri e di grosse vivande)、出費も少なく、良き習慣を守り、男女共粗衣をまとった (di grossi drappi vestivano)」^⑮ として質実剛健ぶりを示し、「持参金は普通100リブラ、200乃至300となると当時は大変な持参金だった」^⑯ とし、大抵の娘は「20才またはそれ以上で」^⑰ 嫁に行ったとする。モンタペルティ前夜のフィレンツェはまだ市全体としては後のような経済的状況に入っていなかったことを推測させる記述がある。持参金の低さは、すなわち経済的離陸以前^⑱ だったことを意味していると取っても差支えないのではあるまいか。

1260年、フィレンツェのゲルフィ党は、スペインの Alfonso 王に、皇帝位を継いで Manfredi を倒してほしいという要請を行うための大使 Ser Brunetto Latini^⑲ を派遣したが、モンタペルティ戦争の結果 Manfredi の勢いが上り過ぎたため、Alfonso の皇帝位就任の計画は立消えとなった。

同年、シエナにいたフィレンツェ亡命者とシエナ市民は、Manfredi 王に使いを送って、フィレンツェに対抗するための援軍を求めたが、王は処置するどころか返事もくれない。そこで不満のまま立去ろうとした時、Manfredi はドイツ騎兵100を貸そうと言う。少なくとも600騎以上を期待して

いた使者は、仲間に申訳が立たぬとして断ろうとすると、Messer Farinata degli Uberti が断らないで、その代わり王の旌旗も一しょに貸してもらおうよう、「そうすればたとえ兵力は少なくとも、もっと多勢送らなければならなくなるような所へその旗を置こうじゃないか^⑧」と助言したので、旗と少数の兵力を借りて帰国した。案の定人々は嘲笑し、フィレンツェ亡命者たちは失望した。

同年5月フィレンツェは総動員でシエナに向かい、カッロッチョ（市旗、鐘をつけた牛車）を引いて行く。カッロッチョのくわしい説明（p.133）は省略。ただその説明からも、コムーネの協同体としての統制力が推察しうる。動員がきまると、出発の一カ月前から、メルカート・ヌオーヴォの端に移されていた、かつてのサンタ・マリーア門のマルティネッラ^⑨という名の鐘が昼も夜も絶え間なく鳴らされて、市民の戦意を掻き立てたとされている。この鐘も、カッロッチョとは別の専用車の上に乗せられて、戦場に運ばれ、「カッロッチョとカンパーナの偉観（pompa）によって昔のポボロと我々の先祖の高慢（superbia）は支えられていた^⑩」というコメントが付されている。フィレンツェ軍はシエナ領内のヴィーコ、メッザーナ、カショーレ等の町（castello）を占領した後、シエナ自体を包囲し、シエナ市民を侮辱して市内から見える丘の上に塔を築き、そこにオリーブを植えた。こうした包囲が続いたある日、フィレンツェ亡命者らはドイツ騎兵にたっぷり御馳走してしこたま酔わせ、さらにうんと褒美をやる約束をして、フィレンツェの包囲軍に突撃せよとけしかけた。それは勿論 Messer Farinata Uberti の助言によるものである。酔っぱらって正気を失ったドイツ兵は、一挙に打って出たために、敵を侮って油断していたフィレンツェ軍はポボロも騎士も一時浮き足立って取り乱し大損害を受けたが、何しろドイツ軍が少数なので陣を立て直し、シエナから出て来た者を一人残らず殺した上、Manfredi の旌旗をも奪って地面に引きずり回し、その後間もなくフィレンツェに引き揚げた。

シエナ人とフィレンツェ亡命者は、フィレンツェ軍が少数のドイツ軍にどんなに醜態を演じたかを見て、その数が多ければ勝てると確信し、当時商人だった Salinbeni の会社から2万フィオーリーノを調達して再び Manfredi に使者を送った。使者がドイツ兵の奮戦ぶりと、少数のために敗れ、旌旗を奪われて引きまわされたことを告げると、Manfredi は激怒し、シエナ人のお金と引き換えに、3カ月の期限でドイツ騎兵800と Giordano 伯を派遣した。同軍と使者は、1260年7月にシエナに到着、フィレンツェと同盟しているモンタルチーノを攻撃し、さらにピサを始め、全ギベッリーニ党員に救援を求めた。その結果シエナには1,800騎が集合、その中心はドイツ人だった。

フィレンツェの亡命者達は、折角ドイツ騎兵を招いたのに、3カ月の期限の内1カ月半が経過したのを見て、謀略（inganno di guerra）なしでは何もできぬと考え、それは Messer Farinata degli Uberti と Messer Gherardo Accia dei Lamberti に委せられた。両人は二人の修道士にフィレンツェのポボロ政権に使いをさせて、シエナの有力者9人の了解の下で、彼らがシエナの市民中最大の者 Messer Previsano Salvani の政権に厭気が差していること、だからもし1万フィオーリーノもらえれば喜んで国を売るつもりでおり、フィレンツェがモンタルチーノを補給すると

いう名目で大軍を送れば、アルビア川まで来た時、シエナ市のアレツォに通じるサント・ヴィート門を開けることを伝えさせた。修道士は9人の印章の付いた手紙を持ってポポロの長老に会い、フィレンツェのポポロとコムーネに名誉をもたらすはずだが、事は大変な秘密なので、神前で誓約して少数にのみ伝えたいと述べた。そこで、長老たちはポポロの主要な指導者の一人で、「とても大胆な仕事師 (di grande opera e ardire)」^③の Spedito di Porta San Piero と、Messer Giovanni Grancalcagni とを代表に選び、彼らが祭壇で誓約した後、修道士は口上を述べて手紙を見せた。二人の長老は、「知恵よりも意欲 (volontà) に動かされていたので」^④、その契約に信を置き、直ちに1万フィオリノは用意され、それを預託したままポポロと貴族の合同会議を開催する。そこでモンタルチーノに補給を行うため、5月の時以上の大軍でシエナ領内に攻め入る必要が生じたと報告した。会議には Guido Guerra 伯やゲルフィの貴族たちも列席していたが、彼らはこの偽の契約のことは何も知らず、戦争についてはポポロ以上に知識がある上、ドイツ軍がシエナへ来ていることも知っていたし、シエナのサンタペトロニッラ (修道院) の外門でポポロが見せた醜態も目のあたりにしていたので、遠征には賛成しなかった。そこで、市民の気持は様々で戦意に乏しいこと、モンタルチーノの補給はもっと安くできるオルヴィエート人が買って出ていること、ドイツ人は3カ月分の賃金しかもらっておらず、すでに半分過ぎているので、すぐ期限が切れ、それ以後には敵は捕虜同様、あるいはそれ以下だと、賢明で勇敢な騎士 Messer Tegghiaio Aldobrandi degli Adimari が説いた。そこで傲慢な長老 Spedito が、「怖い奴は brache を探せ」^⑤と罵り、騎士の方でも「戦争で肝腎の時には、おれの行く所について来ることもできないくせに」^⑥と罵り返した。Messer Cece Gherardini が、Messer Tegghiaio Aldobrandi degli Adimari と同じ意見を述べようとする、長老は100リブラの罰を課すと脅し、それでもやめない、200、300と釣り上げ、まだやめない、首を切ると脅してやめさせた。こうして傲慢で軽卒なポポロが勝ちを占めて、早速遠征の準備を始めた。

ポポロ政権は友邦の援助を求め、ルッカ、ボローニャ、プラート、ピストイア、サンミニアート、サンジミニアーノ、ヴォルテッラ、コッレ等が遠征に加わる。フィレンツェでは、800の騎士と600の騎兵が用意された。8月末日、人々が出陣。カッロッチョとマルティネッラを引いて行く。(以下は翻訳)「またほとんど全ポポロが、地区の旗をかついで参加。歩兵または騎兵を1人または2人、あるいはそれ以上出さなかった家は一軒もない。シエナの郊外でアルビア川のほとりにあるモンタペルティという場所に、フィレンツェ人の救援に赴いたペルージャ人やオルヴィエート人と共に集合した時、騎士は1,000騎以上、歩兵は3万人以上に達していた。こうした下準備の途中で、一丸となって取引きをした上記の人々は、またフィレンツェに別の修道士を派遣し、何人かのフィレンツェに残って軍に加わるはずのギベッリーニ党の大市民と交渉して、全軍が集合した際、彼らが四方八方にとび出して隊列から逃れ、シエナ側に加わってフィレンツェ人を驚かす手筈を整えていた。だが彼らにはフィレンツェ軍に較べて味方が少数すぎるように思えた。やがてその軍勢はモンタペルティの丘の上に上り、賢明な案内役の長老たちが、内部の裏切り者の手

で約束の門が開かれるのを待機していた際、ポルタ・サン・ピエロ区の市民で Razzante という名のギベッリーニ党員が、フィレンツェ軍の待機ぶりから何事かを察知し、シエナ城内に使せよという戦場のギベッリーニ軍の要望もあったので、行ってフィレンツェの亡命者達に会い、シエナは裏切られる筈で、フィレンツェ人が騎士と歩兵の大戦力をくり出したので、決して戦闘をすすめてはならないと通報した。すると Messer Farinata と Messer Gherardo の両人は、もしお前さんがそんなことをシエナ中に言い触らしてくれたら、我々を皆殺しすることになるだろう、むしろ我々としては、それと正反対のことを言ってもらいたい。というのは、もしも今ドイツ軍が戦ってくれなかったら、我々はもうお陀仏で、二度とフィレンツェには戻れないからで、我々はいつまでも惨めにさまよう位なら、一挙に死んだ方がましなんだよ、と語った。Razzante は両人の秘密を悟り、頭に花冠をかぶると愉快そうな顔をして、前述の二人と共にシエナのポポロ一同とその味方が集まって会議を開いている所へ赴き、晴ればれとした顔で戦場にいるギベッリーニ党と裏切り者たちからの調子の良い知らせ、つまりどんなにフィレンツェ軍は統制がとれてなくて、指揮がなっていないとか、協力体制ができていないとか、思い切って攻撃をしかけたら必ず総崩れになるだろうとかいったことをその場で演説した。Razzante による嘘の報告がなされた途端、ポポロは『合戦だ』と叫んで武器をつかみ、あのフィレンツェ人に明け渡す筈になっていたサント・ヴィート門からドイツ軍を先頭にして出陣し、それ以外の騎士とポポロが後に続いた。門が開かれるのを待っていたフィレンツェ軍の指揮者たちは、ドイツ軍と他の騎士やポポロが彼らに向かっていざ戦わんと飛び出して来るのを見、その素早い攻撃と、味方の油断ぶりと、またそれ以上に、Pressa 家、Abati 家その他のようなギベッリーニ党の大部分の人々が、敵軍が近づくのを見た途端、打合わせておいた通り敵方にと逃げ去ったのを見て、ひどくうろたえてしまったのだ。だからフィレンツェ人とその友人たちに隊列を組ませて、合戦に立向かわせるところではなかった。そしてドイツ軍が潰滅的な打撃を与えていた時、裏切り者の Messer Bocca degli Abati は剣をつかんで、フィレンツェ共和国の騎士軍の旗を持っていた同市の Messer Iacopo de' Pazzi の手に切りかかり、切り落とした。騎士とポポロはその裏切りと旗が倒れるのを見て、一散に逃げ出した。だが騎士たちは真先に裏切りに気付いたので、名士の内で死者や捕虜となった人は36人しかいなかったのに対して、フィレンツェのポポロ歩兵、ルッカ人、オルヴィエート人は、モンタペルティの城にとじこもり、全員捕えられるか殺されたため、大量の死者、捕虜が出た。すなわちポポロの人々、それもフィレンツェのポポロの最上の人々や、ルッカ人その他の味方の人々の内、2,500人以上が戦場で倒れ、1,500人以上が捕虜となった。このようにして、忘恩で傲慢なフィレンツェのポポロの狂気 (rabbia) は鎮められた。それは1260年9月4日火曜日のことで、カッロッチョやマルティネッラという名の鐘やフィレンツェ人とその友人の多くの武器が戦場に残された。こうした原因で、10年にわたってあれ程勝利と勢威を誇ったフィレンツェの古いポポロ (政権) は倒れて消滅した^⑨。

敗戦のニュースでフィレンツェ市民は大いに悲しむ。一家に一人は死者か捕虜がいた。帰国し

た人々は、亡命者たちがドイツ軍やギベッリーニ党を伴って帰国してくることをひどく恐れ、1260年9月13日それ以上別れを惜しむこともなしに市から退去して亡命した。その主要な約70家(略)。「その退去については、ゲルフィ党は大いに非難されるべきである。何故なら、フィレンツェ市は立派な城壁を備え、堀にもそれを守り通すのに十分な水を貯えていたからであるが、罪を罰する神の審判は避け難いものだ²⁸⁾」

木曜にゲルフィ党が去ると、次の日曜日の9月16日、亡命者は Giordano 伯とその軍隊と共に、何の抵抗も受けずフィレンツェに入城、Guido Nevello を翌年1月以降2年間の任期でポデスタに選出し、同伯の軍隊の往來のためにギベッリーニ門とギベッリーニ通りを開いた。同伯は市内に残留した全市民に、Manfredi 王への忠誠を誓わせ、領内の5つの城を破壊させた。Giordano 伯は、総司令官 (Capitano generale) もしくは Manfredi 王の代官 (Vicario) としてフィレンツェに止まり、トスカーナに残留するゲルフィ党の掃討に努めた。彼らはゲルフィ党員の財産を取上げ、その建物や塔を多数破壊、没収した財産をコムーネに収めた。²⁹⁾

敗北のニュースが伝わると、法王と枢機卿たちは大いに悲しんだが、占星術師兼魔術師として名高い Bianco 枢機卿が、敗者が将来勝利を得て帰国するだろうと予言³⁰⁾した。

フィレンツェと同様、プラート、ピストイア、ヴォルテッラ、サンジミニアーノその他の町から、ゲルフィ党員が亡命して、ギベッリーニ党員が帰国したが、ルッカだけは別で、そこにトスカーナの亡命者達が結集した。文なしでフィレンツェから亡命したポボロの長老 Spedito に会った Messer Tegghiaio Aldobrandi は、ズボンのくるぶしの袋から500フィオリノを引っ張り出して Spedito に示し、「わしがどんな具合にズボンを用意したか見てくれ。お前の無謀と傲慢のために、お前もわしもみんなもこんなひどいことになったじゃないか³¹⁾」と侮辱すると、Spedito は、「何でお前たちは、わしらのいうことなんか信用したのだ³²⁾」と答えた。同じころ Giordano 伯はエンポリでギベッリーニ党の会議を開いた後プーリアに戻り、Guido Nevello が Manfredi の代官職とトスカーナ総司令官の地位を継ぎ、ゲルフィ党についた兄弟 Simone や同族のリーダー Guido Guerra をトスカーナから追放。エンポリの会議で、Guidi 伯、Alberti 伯、Santa Fiore 伯、Ubal dini 伯、および近所の全都市がフィレンツェ市の破壊を提案し、その力を奪って小村に変えようとしたが、賢明な騎士 Messer Farinata Uberti が、「ロバがカブラを知るとばらばらにしてしまう³³⁾」および「狼がいないと、びっこの山羊が出かける³⁴⁾」という二つの諺を混ぜて、「ロバが知ってびっこの山羊が出かける時、狼がいないとカブをばらばらにする³⁵⁾」ということばをまとめ、フィレンツェ破壊の愚かさや危険を説き、たとえ彼一人になっても、生命のあるかぎり剣を取ってフィレンツェを守ると言明したため、Giordano 伯もその人物と権威と追従者が多いことを考慮してフィレンツェ破壊を思い止まった。

翌1261年9月、フィレンツェ在住中の Manfredi 王の代官 Guido Novello 伯は、トスカーナのギベッリーニ党を集めて、ルッカの領域に攻め入り、Castello Franco, Santa Croce を占領し、Santa Maria a Monte を包囲し、3カ月の攻城の後、これを落とし、次いで Monte Calvi, Pozzo

を奪い、ついにトスカーナのゲルフィ党亡命者の精鋭が立て籠る Fucecchio を攻める。1 カ月包囲するが、城内の兵がすぐれ、集中豪雨が降ったため攻城を中止してフィレンツェに戻った。

このころフィレンツェおよび他の都市からの亡命者は、ドイツの Curradino の許に使いを送り、叔父の Manfredi 王を攻めるようにすすめたが、Curradino の母親が反対したので実現しなかった。

1263年夏 Guido Novello は、ギベッリーニ軍を率いてルッカ領内に侵入、ルッカ軍は敗北、次々と周辺の城を奪われた上、シエナにモンタペルティ敗戦の捕虜を抑留されているため、ルッカは戦いの継続をあきらめ、フィレンツェとトスカーナ諸都市の亡命者をルッカから追放する代りに、領土と捕虜を返還してもらい、またルッカ人は全員亡命しなくても良いという条件の秘密協定を Guido Novello との間で結ぶ。こうしてフィレンツェその他の亡命者は3日以内にルッカを退去しなければならなくなり、一同はボローニャからモデナ、レッジョへと去って行った。

モンタペルティ戦争の結果 Manfredi 王の威勢は大いに上がるが、1261年法王位についた靴屋の息子 Urbano IV は法王庁の前途を危ぶみ、1263年に公会議を開いて Manfredi を破門し、その領地をフランス王 Luis の弟 Carlo d'Angiò 伯に与えることを決議して、次のベネヴェントの戦いにつながる。

以上の Malispini の記述は、いく分それよりくわしいものの、ほとんどそのまま Giovanni Villani に引きつがれているといっても過言ではない。ただし、Villani の『年代記』の Libro VI, Cap. LXXXV の「いみじくも多くの古人たちが語った通り、フィレンツェのゲルフィ党員のルッカ退去は、彼らの富の原因となった。何故なら、多くのフィレンツェ亡命者たちは、それ以前は全く馴染みのなかった山の彼方のフランスへ金もうけに出かけたからで、そこから後に莫大な富をフィレンツェに持ち帰った。だから〈必要は勇者を作る〉という諺が生まれた^⑧」という一文は、Malispini にはなくて、Villani と M. Stefani にはある。Malispini は、1280年代前半、まだモンタペルティ戦争がもたらした市の変革の成果が完全に稔らぬ内に没したのに対し、後の二者は少なくとも1300年以後のことを知っていたため、こうした差が出来たのではないだろうか。また Guido Novello が、フィレンツェ市民から石弓その他の武器を取り上げ^⑨て、しきりに自分の本拠地に運んだと記され、フィレンツェ市民の武装解除に励んだことも分かる。敗北の衝撃に加えて、外圧も、フィレンツェ市民の軍事力を低下させるために作用していたのであり、約10年間周辺に猛威を振るったポポロの軍隊が、二度とよみがえれなかったとしても意外ではない。

第二章 シエナの年代記類に描かれたモンタペルティ戦争

第一節 *Kalendarium Ecclesiae Metropolitanae Senensis* 『シエナ司教座教会暦』^① および *Cronaca Senese dei Fatti Riguardanti La Città e Il suo Territorio di Autore Anonimo del Secolo XIV* 『14世紀の市と領域に関する事件の作者不明のシエナ年代記』^② に描かれたモンタペルティ戦争

前章でフィレンツェ年代記類にほぼ共通している、モンタペルティ戦争に関する記述を読んだが、それは必ずしも納得できる内容を伝えているようには思えない。例えば、フィレンツェ亡命者、とりわけ *Farinata degli Uberti* の活躍ぶりはどうであろうか。^③ 彼がいかに名門の出身者ですぐれた才知の持主だったとはいえ、亡命先の都市の鼻面をひき回して、自分の祖国を破るなどということはありうるのだろうか。やはりその記述には明らかにフィレンツェ人の「カンパニリズム(郷土自慢)」が反映しており、モンタペルティの敗戦すら、フィレンツェ出身者の才智のせいだとしているように感じられるのではないだろうか。一体そのあたりの事情は、シエナ人の記述ではどうなっているのだろうか。おそらくこうした好奇心が自然に湧いてくるはずである。それに何といってもモンタペルティ戦争の勝利者はシエナである以上、フィレンツェ側からの記録だけでは、まさに片手落ちのそしりを免れられないであろう。

こうした理由から、以下でシエナの古い年代記等の記録に描かれたモンタペルティ戦争像を辿って見ることにする。残念ながらシエナはフィレンツェ以上に年代記の出現が遅れた都市だったので、*Malispini* のような同時代人のくわしい記録は見当たらず、最古の記録は、司教座教会が示した『暦』の短いラテン文に頼る他ないとされる。この『暦』(または『命日表』^④)は1129年 *Ranieri* 司教がその地位について以来、司教座聖堂参事会員に命じられて、典礼の準備用に書き続けられたもので、一年を通じて特に同市に関係の深い事件、特に名士の死が記入され、1479年まで続けられている。ただしその記入の仕方は相当散漫にならざるを得なかった。後に本稿で紹介する他の二つの年代記と同様、*L. A. Muratori* によって、*Rerum Italicarum Scriptores* に加えられることになったので、今日我々にも利用できる。その中でモンタペルティ戦争は以下のように記録されている。

「II Non(=Nonae) sept. (9月4日)

1260年、フィレンツェ人、ピストイア人、ルッカ人、プラート人、アレツォ人、ヴォルテッラ人が、オルヴィエート兵と共に、最大限の自他の援軍全員と共に、モンテ・セルヴォレとモンテアペルトの砦の間で、シエナ人によって殺された。フィレンツェ側では、1万人以上の兵が死に、1万5千人以上が捕虜となり、4千人以上が逃走した。天幕、旗、あらゆる武器や戦いの装備、カッロッチョも、それに積んで運んで来た鐘も後に見棄て去られた。その前にフィレンツェ人の裏切り者たちが詐欺によって破壊したポッジボンシの砦は、この年から再建に着手され、シエナ人はモンタルチーノを根こそぎ破壊させた。^⑤

もし以上の記録が同時代に書かれたものであればこの上なく貴重であるが、数字に関して、フィレンツェ側の資料と余りにも差があることが注目に価する。シエナ人は現実に死者を見、捕虜を捕えていたのだから、彼らの方が正しい可能性はあるが、1万5千以上の捕虜が数万の市民に管理できたのかも気になる問題である。

次に、14世紀に書かれた、執筆者不明の年代記の記述を眺める。正式の標題は先に記したので省略するが、14世紀の中ごろに書かれ、1202年から1332年までは規則的に記され、それ以後1362年まではとびとびに記され、さらにおそらく別人の手で、1360—91年の部分が加筆されている^⑥。1268—81年の部分が欠けている。「13世紀の事件は、多分口承に基づくため、余り正確には伝えられていない」^⑦ (Lisini) とされているが、それにもかかわらず、これがシエナ側から残された最も古くて、しかも一応全体の模様が記されていて、それ故最も貴重な記録だと見なしうるのではないだろうか。次回に紹介する Paolo di Tommaso Montauri の年代記は、これに較べるとはるか長いが、かなり潤色されているという印象が否めないものである。

1250年、Federico IIの死がシエナに伝わる。Malispiniのように Manfredi による暗殺とはせず、パルマでの敗戦による心労の結果だとする。

1251年、トスカーナでギベッリーニ同盟結成さる。Monte sancto Savino を略奪。

1252年、モンタルチーノがシエナに反逆。シエナがこれを攻めると、フィレンツェの援軍の反撃を食う。ギベッリーニ同盟によるフィレンツェ勢力圏への報復、フィレンツェのピサ侵入、ピサのルッカ侵入、と戦いは拡大した。

1253年、シエナでカピターノ制度成立。ギベッリーニ軍フィレンツェ領を荒らす。サン・カシアーノで略奪。サン・ガッロでフィレンツェ軍が反撃するが、その作戦が失敗、シエナ軍多くの戦利品を得る。

1254年、ギベッリーニ党はフィレンツェ人と和平を結ぶ。シエナは周辺の山賊化した領主を討伐する。シエナはピアンカスタニアイアを攻略して併合。

1255年、ポポロの鐘(集会召集用)が鑄造さる。

1256年、シエナはトルニエッラを占領して略奪。ギベッリーニ党の敵で、同地の領主 Ruberto 伯が殺害され、同市は併合される^⑧。

1258年、砦や Tufi 門の建設。市が拡大し始めたこと。同年ポッジボンシがフィレンツェに従おうとしなかったため、フィレンツェはこれを「占領し、略奪し、住民を皆殺しにし (miseno... a sterminio la gente) た^⑨」(この事件、Villani では1257年とされる。)この年アレツォ人がコルトーナを占領して破壊した。同年9～12月の4カ月間、続け様に雨が降って、農作物ができず、飢饉が発生した。

1259年、シエナは Uberto 伯の治めるカンパニャティコを攻める^⑩が、同伯戦死する前奮戦して多数を殺す。誰かの投げ槍が頭に当たって落馬して即死した。町から追われたコルトーナ人が、行くあてもないので帰国して、祖国を再建した。フィレンツェ人はそれを見て後悔した。

1260年、(以下翻訳)「Francesco da Trevigi がシエナのボデスタだった当時、フィレンツェ人がモンテアルチーノ(ママ)に(武器や食糧を)補給するためにやって来た。そして補給をすますと(fornito che l'ebeno とあり、このように訳するのが自然だが、それだと時間的には他の記録とは反対に、モンタルチーノからの帰国途中と受け取れる)、彼らの同盟軍と共に、マレーナ川とビレーナ川の間にあるモンタペルティに宿営した。それは2万以上からなる大軍だった。彼らはシエナに使いをよこし、降伏するために3日間の猶予を与えるが、もし降伏しなければ、皆殺しにして、門から入らないため城壁を壊すつもりだと伝えさせた。使者がシエナにつくと、鐘で集会が召集され、24人委員会が開かれた。コムーネに資金が無いと見た misser Salinbene (ママ) Salinbeni は、市の防衛のため10万フィオリノ提供しようとして申し出て、そのため人を寄越すようにと言った。すぐ人々が Salinbeni 家に行くと、その10万フィオリノを緋色の布で包んだ車に積み、手に沢山のオリーブを持った。Salinbene と車を引いた人々は、Talomei (ママ) 広場に上り、これらのお金を全部聖クリストファノ教会の中に運び込んだ。misser Salinbene は立上がつて、24人委員の仲間に対し、兵士をお金で傭うように、またお金については気にしなくても良い、もしそれで足りなくなったら、それと同額を貸してやるからと述べた。その気前の良さと、たっぷりと用意されたお金とを見ると、人々は返事を聞きにくる使いに返事ができるようになったと言った。また返答は misser Salinbene に委せられた。使者は聖クリストファノ教会に入り、ドゥカート (ママ、前はフィオリノと記す) の山を見て驚いた。misser Salinbene は、3日間の猶予を与えるから、城壁を3カ所破壊せよという彼らの要求に対し、次のように答えた。我々は君たちに、城壁を抜ける気持はあっても、それを減らすつもりはないと答えたい。君らが与えた3日間で、まず我々は我々がここへ持って来て、君達も見ることが出来るあのお金が、使われるのを見たいのだ。またこのお金で足りなければ、我々はここにまだこれと同額のお金を持っている。君たちは十分守りに気をつけ給え。我々は軍備を整えて戦場で君たちと対面しよう。そして君たちが自分で言うほど強いのかどうかを、確かめるだろう。この返事を君たちのフィレンツェ人たちや司令官(Capitano)の所へ伝えたまえ。使者は別れを告げてモンタペルティの陣営に戻り、我々シエナ人から言伝てられて来た返答を伝えた。この返事を聞いてフィレンツェ人の全軍は驚いた。彼らは守りを固めて警戒を強化した。我々シエナ人は、直ちに皇帝が我々シエナ人を守るために送ってくれた、全員が百戦錬磨の800人の精兵を擁している Arrigo d'Astrinbergho という名の皇帝軍の隊長の許に使いを送った。さらにシエナのコムーネは、ナポリ王にも救いを求めると、王は我々に misere Giordano と1,000人の騎兵を派遣した。さらに Aldobrandino da Santafiore 伯にも使いを送った。かくして短時間の内に、フィレンツェ人のそれよりも大きな軍隊をも打破れるほど多くの人々を結集させた。そのために当時、人々はシエナが槍騎兵を一人月30ドゥカート、歩兵なら1カ月終わった時の支払いで5ドゥカートという値段で傭っているという噂を開いた。こうして人々が集合すると、勇士の数は1万人以上に達した。合戦しに行く筈の朝には、おごそかにミサが挙げられ、聖処女マリアに沢山の供物が捧げられた。miser Buonaghuida は24人委員会によ

て選ばれた市長 (sindaco) だったが、再びその地位に選ばれた。司教はおごそかな行列の後、市の鍵を聖処女マリアの手中に与えた。そして紙を取り出すと、シエナを聖処女マリアの都市と名付けた。このように憐れみの聖母への祈りがなされ、聖母は我々を多くの危険からお守りになった。我々は出陣の準備をし、主たる旗として白旗を先頭に掲げ、その後からチッタ区 (Terzo di Città)、サン・マルティーノ区、カモリア区の軍勢が続いた。サント・ヴィエーノ門から出て、神の名と共にフィレンツェ軍の陣営に近づき、コルティーネの丘に陣取った。またルオーポリの丘の周囲も軍勢で埋まった。真先に市の白旗が進み、その旗の後を全三区の軍勢が総て行進し、その数は1万に及んで、フィレンツェ陣営の前に姿を現わした。彼ら(チッタ区軍?)は陣地を定めると、そこに旗を立てた。続いてサント・マルティーノ区とその人々が、丘の背後でてんでに身を潜めた。フィレンツェ人はそれを傍観していた。やがてカモリア区が続いてやって来て陣取った。彼らは同じ軍勢として進みながら、各軍毎に上衣を変えた。最初の上着は聖処女マリアの助けを求めて白だった。第二の上着は流血を意味する赤だった。三度目の黒旗と黒い上着は人々の死を意味していた。フィレンツェ軍の陣営に対して、こうした三つの意味が展示された。我々の全軍は、実際の数の2倍以上に見えて、このことのために、フィレンツェ人は敵がそんなに多数いるのを見ると、一人のこらず度胆を抜かれてしまった。さらに夜になると、真夜中ごろ、彼らはまるで昼間のような明るい光が、ちょうど天蓋そっくりにシエナの上をすっぽり覆っているのを見た。それはオペラ・サンクテ・マリエの我等の聖母が、頭にそういう天蓋を被っておられる有様とそっくりだった。こうした印を目にしたフィレンツェの司令官 (Capitano) はたまたま魔術師で、ランプの中に悪魔を閉じこめていたので、自分はその戦いで死ななければならないのかどうかを、その悪魔から無理矢理聞き出した。するとその悪魔は、あんたは善と悪 ('l bene e 'l male) との間でないと死なないと返事をした。悪魔というものは、このような話し方をして、相手を不幸に陥れようと図るものだ。夜になると、miser Giordano とわがシエナ軍全員の相談の結果、合戦には翌日一斉にとりかかるつもりだが、その夜フィレンツェ軍に休みを取らせないために、その陣営に夜襲をかけることにきまった。また我等のシエナ軍と勇敢な隊長たちは、その夜非常に用心深くフィレンツェ陣営の反対側で、朝太陽を背にし、敵の顔に陽が当たって、有利に戦えるような場所に移動した。彼らはこのような準備をしておいた。朝になると小競合いが始まり、合戦が変わった。misere Arigho d'Astrinbergho の甥は幸運にも一番槍の名誉を得、その後他の五つの隊が次々と従った。第一隊はチッタ区、第二隊はサント・マルティーノ区、第三隊はカモリア区、第四隊は misere Giordano とその甥の隊、第五隊は Arigho d'Astrinbergho と Aldobrandino da Santa(ママ) Fiore 伯の隊だった。フィレンツェ人は大きな不安と恐怖におびえつつ、向うで待ち構えていた。多くの敵が、シエナ軍が勝つに違いないと見ると、フィレンツェの方を目指して逃走し始め、敵陣は乱れた。何故なら全員うろたえていたからだ。だが我等のシエナ軍がよく見張ったので、フィレンツェ陣営から抜け出して来た者は全員捕えられるか、あるいは本当に殺された。捕虜は全員シエナ軍の天幕の下に連行されて、しっかりと監視された。フ

イレンツェ陣営は、合戦が始まった途端こんな風に攻め落とされたのだ。彼らの司令官は、そこにある川は何という名かとたずねると、それはマレーナとビエーナと言いますという答が返ってきた。そこで彼は、敵の悪魔が自分を欺いたことを悟り、今日はわしの命日じゃ、死ななければならないことが分かったぞ、と言った。彼はすっかり狼狽して、もうほとんど馬にしがみつくとさえできなかった。我々の勝利が続き、その結果1万人以上が殺され、同じ位、あるいはそれ以上が捕虜となった。物売り女の Usiglia は36人の捕虜をとらえて、一本の紐でしばって引っぱって来た。それというのも、降参しようとしないうちは、全員殺されたからだ。だから降参する気になり、捕虜として受け入れられた者は幸運だった。一人の太鼓叩きがマレッコッティの塔の上に登っていて、シエナに残された民衆に対して、わが軍がどのように合戦に勝ち、フィレンツェ人の旗がどのように地面に倒れたかを伝えた。また時にはわが軍が少し押し返されたと言うこともあり、戦況を見たまに話した。塔の下には miser Buonaghuida とシエナのあらゆる善男善女や無垢な男女の子供らが集まって来て、全員ひざまづき、聖処女マリアに対して、我等に勝利を与えたまえと祈りを捧げた。こうして我々の祈りは聴き入れられ、フィレンツェ人は敗北し、その司令官は戦死した。彼らの委員たちや、我々に三日間の猶予を与えると伝えにシエナへやって来た彼らの使者は捕えられた。彼らはすぐその正体を見破られて、戦場へ食糧を運んだロバに乗せられたが、彼らを侮辱するため、ロバの尻尾の方に向けて座らされた。あんまり大勢の人々が敗れて死んだので、ヴァル・ディ・ビエーナの平野は、すっかり流血で充たされた。マレーナ川とビエーナ川は血を流したが、それほど人馬の死がひどかったからだ。鐘の音でわが軍が集合し、捕虜は全員後手にしぼられ、頭に何も冠らずに前を行進させられた。その先頭を後ろ向きにロバに乗った使者達が進んだ。こうしてシエナ人は、サント・ヴィエーノ門から凱旋入城した。もし我々が善良でなかったら、子供たちが石を投げて使者を殺してしまったところだが、人々に制止された。わが軍は今言ったような様子で帰国すると、それぞれ自分の捕虜をつれて自宅に戻り、彼らは牢屋に入れられたが、とても収容しきれなかった。多くの者は足かせをつけられて、しっかりと見張られた。翌日人々は司教座教会へ行き、神と聖母マリアに、フィレンツェ人相手に得た大勝利について感謝した。人々はミサと聖務を済ますと意気揚々と帰宅して、その日はお祈り以外のことは何もしなかった。その勝利は9月4日のことで、同月6日には会議が開かれ、捕虜の数を数えると、11,000人だった^⑩。

以上でモンタベルティ戦争そのものについての記述が終わり、続いて24人委と misere Giordano, Arighe d'Astrinbergho および Aldobrandino da Santa Fiore の一行、旗手、百人隊長、そしてポポロ会員が、同じ6日に、戦争の原因となったモンテアルチーノを攻めるために出陣した。フィレンツェ軍の敗北を知った同市民はおびえながら、シエナ軍が到来して手当たり次第放火しているというニュースを聞いた。同市民は大勢城外へ攻め出して殺された。かなわぬと見た彼らは、城にとじこもったが、ドイツ兵の猛烈な攻撃で、9月7日の22時までに落城した。misere Arighe と miser Giordano は女たちを教会にとじこめて、その名誉を守った後、市内を略奪し尽くし、

同市の城壁を壊した^⑫。シエナ軍は捕虜を伴い戦利品を持って帰国して、二度の勝利を祝う祭りをした。店を三日間締め切って祝った。教会に逃れていたモンテアルチーノの女や老人らは、最初フィレンツェに向かおうとしたが、一老人の忠告で、首に革帯を巻いてシエナに赴いて許しを乞うことにした。男性の老人たちの後から女たちが続き、全員がシエナ人に慈悲を求めたので、シエナ人は憐れみ、24人委員会が集まって協議、「汝らが12,000人の死の原因となったが、慈悲を求めるならば、皆でモンタペルティへ行って、惨状を見た上、放置されている死体を埋めてやれ^⑬」と命じた。モンテアルチーノ市民は一斉にこれを引受け、3日ばかりで埋葬をすませてシエナに戻ると、シエナに忠誠を誓い、前よりも小さい市の再建が許された。モンタペルティ一帯は余りの死体の悪臭のため、その後見棄てられた。この間にシエナ軍はフィレンツェ領内に攻め入り、砦20をこわした。さらにアレツツォ周辺にも攻め込み、2カ月間その辺を荒らして帰国。未曾有の信じ難い程の戦利品と捕虜を入手した。戦利品を最初の勝利以来全部数えると35万フィオリノに達した^⑭。各々の隊長や参加者に戦利品が分けられた。フィレンツェ人は自国の軍が総ぐれとなったのを知ると、反乱が生じて、フィレンツェからゲルフィ党員が皆追放された。その政変は、フィレンツェが庇護を求めたピサによって起こされた。こうしてトスカーナのゲルフィ党員全員が迫害を受けた。いたる所で政変が生じ、フィレンツェ人の不幸を見て楽しんだ。以前はFontebecchiの泉がこの時の身代金で建設されたといわれたが、それは真実ではない。それは別のVichoの丘の勝利の時に作られた。その後フィレンツェ人が来てこれを破壊して敗北したため、前以上に立派に再建しただけである。一度目の勝利は1230年のことで、二度目が1260年9月4日のモンタペルティの勝利だった。この年の項は「フィレンツェ人は、この時シエナに出陣したために受けたのと同じ目に、将来のあらゆる遠征でもあってくれますように。またそれ以上にひどい目にあいますように。アーメン^⑮」ということばで終わっている。

以上でフィレンツェ側の代表的な記録とシエナ側のそれとの大きな違いが明らかとなった。捕虜や死者の数にそれは端的に現われている。

(未完)